



Title	瓜州榆林窟第 2 窟・第 3 窟 : 西夏供養人像・供養人題記集成 (稿)
Author(s)	佐藤, 貴保
Citation	敦煌石窟における供養人像の歴史学的研究. 2020, p. 13-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75899
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

瓜州榆林窟第2窟・第3窟 西夏供養人像・供養人題記集成（稿）

佐藤 貴保

はじめに

瓜州榆林窟第2窟，第3窟，第29窟には西夏支配時代に描かれたと考えられる供養人像が現存しており，西夏の服飾文化等を知るうえで貴重な資料である。第29窟の供養人像の服装についてはすでに複数の先行研究があり，筆者も近刊の〔佐藤 2020〕で詳しいデータを紹介する予定である。一方，第2窟・第3窟は仏教絵画に関心が集中する一方で，供養人像については写真が発表されていないことや判読できる西夏文の供養人題記がごくわずかであることもあり⁽¹⁾，詳しい紹介や考察はこれまでなされていない。

そこで本稿では，筆者が2016～19年にかけて行った実見調査で得られた両石窟の西夏支配時代に描かれたと考えられる供養人像の服装や持ち物，像の高さのデータを掲載する。服の色の情報は筆者が目視で確認したものであり，壁画が描かれた当初の色が経年によって変化している可能性がある。供養人像の高さは供養人像の足元から被り物の頂部もしくは頭頂までの高さ（ただし，下部が見えない供養人像については，視認できる最も低い位置からの高さ）を示している。壁画に影響を与えないようにやや離れた場所から計測しているため，正確な数値を示すものではなく，あくまで他の供養人像との高さを比較する場合の目安として掲載している。高所に描かれているために像の高さを未だ計測できていない第3窟の供養人像についてはデータを掲載していない。

(1) 西夏文題記の最新の調査データは，すでに2016年に筆者と共に調査を行った荒川慎太郎氏によって発表されている〔荒川 2017, pp. 288-292〕。第2窟は主室西壁に描かれた供養人像の一部の供養人題記が判読できる程度である。第3窟の供養人像が描かれている甬道南壁と甬道北壁に西夏文の墨書が書かれていることは荒川氏によってすでに指摘されているが，供養人像から離れた場所に書かれており，これら墨書は供養人とは関係の無い人物による落書きである可能性が高い。ゆえに本稿では第3窟の西夏文墨書を供養人題記としては扱わない。

供養人像の高さ：107.5cm

供養人題記：TY003 [Y2 Tang 03]

1 𦉰 □ □ □ □ □ □ □ □
願…

S4

供養人像：赤いのがった冠を被り、さらに草花柄の飾りの付いたかんざし風の飾りが付いている。一番外側に赤い袍，内側に緑色の衣に赤い帯を締め，その内側に花柄の付いた薄赤い衣を着ている。

供養人像の高さ：106.1cm

供養人題記：TY004 [Y2 Tang 04]

1 𦉰 𦉰 𦉰 𦉰 𦉰 𦉰 𦉰 𦉰
媳女 阿塔麻は一心に

S5

供養人像：黒地に白い縁の付いた冠を被る。外側に灰色の袍，内側に緑色の衣を着ている。

供養人像の高さ：96.0cm

供養人題記：TY005 [Y2 Tang 05]

1 □ □ □ □ □ □ □ □

S6

供養人像：烏帽子のような三角の黒い頭巾を被っている。白い丸首の袍を着て，白い腰帯を締めている。蓋の付いた円筒状の盒子を抱えている。

供養人像の高さ：92.5cm

供養人題記：TY006 [Y2 Tang 06]

1 □ 𦉰 𦉰 𦉰 𦉰 𦉰
…趙(は)一心に帰依する?

S7

供養人像：被り物はよく見えない。耳飾りを身に着けている。白い丸首の袍を着ている。水瓶を手に持っている。

供養人像の高さ：94.8cm

供養人題記：TY007 [Y2 Tang 07]

1 菟鬮 □ □
? ?

S8

供養人像：被り物をしていない。緑色の袍を着て、両手で唾壺を持っている。

供養人像の高さ：88.0cm

供養人題記：TY008 [Y2 Tang 08]

1 袷 □ □ □ □
段…

S9

供養人像：団扇を持っているようだが、服装等の特徴はわからない。像の高さも計測できない。

供養人題記：TY009 [Y2 Tang 09]

1 □ □ □ □ □

・主室西壁北側男性供養人像

甬道とは反対側の、壁面に向かって右（北）側を向いて立っている。以下、最も北側の供養人像を第一身とみなし、順に N1, N2…と番号を付与して、供養人像の特徴と供養人像の高さのデータを掲載する。

N1

供養人像：金色の突起の付いた冠を被り、黒い袍を着ている。白地に緑色の縁の付いた腰当てを着けている。合掌せず何かを持っているらしいが、不鮮明でよくわからない。

供養人像の高さ：103.3cm

供養人題記：TY010 [Y2 Tang 10]

1 □ □ □ □ □

N2

供養人像：金色の突起の付いた冠を被り、赤い袍を着ている。白地に緑色の縁の付いた腰当てを着けている。合掌している。

供養人像の高さ：104.4cm

供養人題記：TY011 [Y2 Tang 11]

1 □□□□□ 姦□□ 鬣□□□
……………州……………臣……………

N3

供養人像：金色の突起の付いた冠を被り，赤い袍を着ている。白地に緑色の緑の付いた腰当てを着けている。合掌している。

供養人像の高さ：103.8cm

供養人題記：TY012 [Y2 Tang 12]

1 姦菀 併
州池? 梁?

N4

供養人像：ほとんど見えない。

供養人題記：TY013 [Y2 Tang 13]1/2+ TY014 [Y2 Tang 13]2/2

1 □□□□□
2 □□□ 頰 備
…………… 菩? 願

N5

供養人像：ほとんど見えない。

供養人題記：TY015 [Y2 Tang 14]

1 □□□□□

N6

供養人像：被り物はほとんど見えない。黒い袍を着ている。

供養人像の高さ：97.7cm

供養人題記：TY016[Y2 Tang 15]

1 □□□□□

N7

供養人像：被り物は黒いものが見えるが形状はわからない。赤い袍（襟が緑色）を着ている。

供養人像の高さ：95.7cm

供養人題記：TY017[Y2 Tang 16]

- 1 □□□□ 髣髴 〇
 …………… 一心に帰依する？

第3窟

・甬道南壁上段女性供養人像

壁画は上下 2 段にわたって描かれていたようだが、下段はモンゴル帝国時代の貴婦人の服装をした女性供養人像で塗りつぶされており、西夏時代の供養人像を視認できるのは上段のみである。供養人像は少なくとも 3 体確認でき、いずれも主室の方向（東）に向かって立っている。

以下、最も東側の供養人像を第一身とみなし、順に S1, S2…と番号を付与して、供養人像の特徴と供養人像の高さのデータを掲載する。

S1

供養人像：上半身は見えない。白もしくは薄赤い地に緑色の縁の付いた袍を着ている。

S2

供養人像：頭頂部は剥落して見えない。緑色の袍を着ている。手に花盆を持っている。

S3

供養人像：全体に損傷が激しく、頭頂部は見えない。緑色の袍を着ている。

・甬道北壁上段男性供養人像

甬道南壁と同様に、壁画は上下 2 段にわたって描かれていたようだが、下段はモンゴル帝国時代の男性の特徴的な服装（つば付きの円い帽子を被る）をした供養人像で塗りつぶされており、西夏時代の供養人像を視認できるのは上段のみである。供養人像 4 体を視認でき、いずれも主室の方向（東）に向かって立っている。

以下、最も東側に位置する供養人像を第一身とみなし、順に N1, N2…と番号を付与して、供養人像の特徴を掲載する。

N1

供養人像：黒い突起の付いた冠を被り、白い袍を着ている。薄赤い腰帯に複数の円い金具が付き、いくつかの金具から吊るされた白地に

草花柄で緑色の縁の付いた腰当てを着けている。腰帯の3つの円い金具から黒いストラップが3本垂れ下がっている。かぎ型の柄香炉を持っている。

N2

供養人像：突起の付いた冠を被り、白い袍を着ている。黒い腰帯に複数の円い金具が付き、白地に草花柄で緑色の縁の付いた腰当てを着けている。腰帯の3つの円い金具からは黒いストラップが3本垂れ下がっている。花を持って合掌している。

N3

供養人像：袍の色はわからない。突起の付いた冠を被っている。黒い腰帯には円い金具が付き、白地に草花柄で緑色の縁の付いた腰当てを着けている。腰帯の円い金具からは黒いストラップが垂れ下がっている。花を持って合掌している。

N4

供養人像：袍の色はわからない。被り物は見えない。腰帯はよく見えないが、白地に草花柄で緑色の縁の付いた腰当てを着けており、ほかにもストラップが垂れ下がっているのが見える。花を持って合掌している。

2. 考察——第29窟供養人像との比較を中心に——

ここでは第2窟・第3窟の供養人像の特徴を、すでに研究が進んでいる第29窟の供養人像と比較しながら述べていきたい。第2窟・第3窟とも男性供養人像と女性供養人像が甬道を挟んで左右対称に配置されている。このような配置は第29窟の供養人像にも見られるが、第29窟では石窟の入口に向かって左側の壁に男性供養人像、右側の壁に女性供養人像が並ぶのに対し、第2窟・第3窟は石窟の入口に向かって左側の壁に女性供養人像、右側の壁に男性供養人像が並ぶ。

男性供養人像の服装のうち、第2窟のN1～N3及び第3窟のN1～N3のような金色の突起の付いた冠や赤い袍、そして腰当て（腰袱、護脾）を着けている供養人像は第29窟にも見られる。第2窟のN2の題記に「臣」という意味の語句が見出せることから、このような服装の像は官僚を描いたものである

ことは間違いない。筆者はこのような服装は宮中での宿直業務を経て採用された官僚が着用していたものと考えている⁽²⁾。第3窟のN1とN2の像では第29窟よりも詳細に腰当てを描いている。腰当ては腰帯から吊り下げられており、腰当てと腰帯とは円い金具のようなもので接続している。腰帯にはほかにも複数の円い金具のようなものが描かれており、それぞれの金具からは細長い黒色のストラップのようなものが垂れ下がっている。

女性供養人については、第3窟の像は損傷が激しく、服装等の特徴を見出すことは困難である。第2窟のS1～S4のように上着を3枚重ね着している服装は第29窟の女性供養人にも見られるが、被り物や頭飾りには異なる点も見出せる。とがった冠は第29窟にも見られるのだが、第3窟のS1～S4の被り物は後方に突起が付いている。またかんざしのような飾りを付けている事例は第29窟の像では見られない。一般的に像の高さは第一身が最も高く、第二身以降は次第に低くなっていくのだが、第2窟では第二身(S2)が最も高く描かれ、第一身(S1)は第二身(S2)と第三身(S3)よりも低く描かれている。頭部の飾りについても第一身は第二身や第三身よりも数が少なくなっている。特に第二身は非常に長い頭飾りを付けている。S5以降の像の高さはS4よりさらに低くなり、被り物も頭巾になっている。上着も2枚重ねもしくは1枚のみに見える。S6以降の、手に盒子や団扇などを持っている女性は従者の可能性もある。ただ、第29窟の従者像には題記が書かれないのに対し、第2窟ではS6以降の供養人像の傍らにも題記が書かれている。

このように第29窟の供養人像と比較すると、男性の供養人像は第29窟同様官僚を描いたものであると判断できる。女性の供養人像は、男性供養人像で描かれている人物の血族ないしは姻族と推定されるが、冠や頭飾りの特徴が第29窟の像とは若干異なっていることを見出せる。

おわりに

本稿では、瓜州榆林窟第2窟と第3窟の供養人像について、筆者の実見調査に基づいて服装や高さのデータを集成した。男性供養人像からはそれらがいずれも西夏の官僚の服を着用しており、同第29窟の男性供養人像と一致するところがあることを確認できた。また第3窟の供養人像からは腰当ての詳細な形状を知ることができた。そして女性供養人像からは装飾品や被り物に多様性があることがわかった。

⁽²⁾ 詳細は [佐藤 2020] で述べる予定である。

本稿で扱った2つの石窟の供養人像については、カルトウーシュの大きさや色、第3窟の供養人像の高さの計測をまだ行っていない。今後の実見調査でそれらのデータを収集していきたい。

参考文献

荒川慎太郎

- 2017 「敦煌石窟西夏文題記銘文集成」, 松井太・荒川慎太郎(編)『敦煌石窟多言語資料集成』府中(東京), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 248-333.

佐藤貴保

- 2020 「榆林窟第29窟供養人像に見る西夏の河西回廊支配」『比較文化研究』30(印刷中)。

[付記] 本研究は、科学研究費助成事業(課題番号15K02906, 16K03083, 17H02401)の助成を受けた。榆林窟の調査にあたっては、石窟を管理している敦煌研究院のほか、調査隊に参加した諸氏の協力を得た。本稿を借りて御礼申し上げる。なお、本稿では、今昔文字鏡の西夏文字フォントを一部使用している。